

解

説



1 命の誕生をただ見せるだけでは、教育にはなりません。

子どもに命の大切さを教える^たと謳い、飼っている動物に子を生ませる飼い主がいます。しかし、命を大切に^たする心は、生まれた命を慈しみ大切に^たする大人の姿を見てはじめて育つもので、ただ子犬や子猫を与えておけばいいわけではありません。逆に、子どもに幼い命がぞんざいに扱われるのを見る経験をさせてしまうと、命を軽視したり、自分の存在価値に自信が持てなくなるといわれています。



2 メスの犬は約6ヶ月間隔で発情し、1回の出産で5~10頭の子犬を産みます。

メスの犬は季節に関係なく6~8ヶ月間隔で発情し、年1~2回出産します(1年に1回だけ発情する犬種もあります)。1回に出産する子犬の数は犬種や体の大きさにもよりますが5~10頭ほどです。毎回の発情で出産・育児をさせるのは犬の体に大きな負担となります。オスの犬は決まった発情期はなく、発情したメスがいればいつでも交尾できます。



3 犬は食べ物や住む場所だけでなく、人とのコミュニケーションを必要とします。

社会的な動物である犬が心身ともに健康に生きていくには、生命を維持する食べ物や水だけでなく、人や他の生き物とのコミュニケーションが必要です。人とのコミュニケーションの不足は、犬にストレスを与え、過剰に吠える、他人を極端に恐れる、咬みつくなどの困った行動の原因となります。



4 世話できる数を超える動物を飼うことは、動物を苦しめ、周囲の環境も悪化させます。

動物をきちんと世話するにはそれなりの時間と手間と経済力が必要です。世話できる以上の数の動物を抱えると、適切な世話が行き届かず、動物を苦しめます。環境も不衛生になり、悪臭や異常な鳴き声などで近隣住民や地域の環境に迷惑を及ぼすだけでなく、人と動物の共通感染症などの危険性も高まります。



5 犬は生後6~9ヶ月で子どもを産めるようになり、親子やきょうだいの間でも子どもを作ります。

犬はオスもメスも生後6~9ヶ月で繁殖できる体に成長(性成熟)し、発情していれば親子やきょうだいでも交尾します。犬は本能に従って妊娠・出産するだけで、自分で繁殖をコントロールすることはできません。放置しておくと、発情のたびに妊娠・出産をくり返し、すぐにきちんと世話をできる数を超えてしまいます。



6 全国で年間約1.3万頭*の子犬が自治体に引き取られ、半数が殺処分されています。

子犬が見たいという一時の感情で安易に生ませたり、無計画に生ませる飼い主のせいで年間約1.3万頭の子犬が飼い主から自治体に引き取られています。成犬を併せると、飼いきれないという理由で年間約7.2万頭が飼い主から引き取られ、保健所等では新しい飼い主を探す努力をしていますが、残念ながらそのうち約4万頭が殺処分になっています>(*平成24年度)



7 犬は人と暮らすように変化した動物で、自然に生きる野生動物ではありません。

犬は2万年以上前に人の近くで暮らすようになり、人間社会で生きようように人が変えた生き物です。犬の先祖を自然と切り離し、犬という生き物に変えたのですから、人は責任をもって世話と管理をしなくてはなりません。繁殖も人がきちんと管理する義務があります。それを怠った言い訳に「自然の掟」を使うのは、無責任といえるでしょう。



8 命をないがしろにする大人は、子どもに間違ったメッセージを伝えます。

子どもは大人の言動を見て育ちます。命を大切に^たする心も、動物を思いやる気持ちも、動物の正しい扱いも、大人の姿から学びます。きちんとした世話をせずただ生かしておくだけの飼い方や、安易に生ませては「捨てる」という行為を見せることは、子どもたちに命に対する間違った考え方を育て、やがてそれは社会に還って来るのではないのでしょうか。

動物の飼い主には、飼っている動物を幸せにするだけでなく、その動物が産んだ子どもも幸せにする責任があります。かわいい、かわいそうといった感情で子どもを生ませたり、間違った自然観で繁殖を放置してはいけません。動物の数がふえてしまうと、世話が行き届かなくなったり、人や動物の生活環境が悪くなったり、飼い主がいらない動物の命を絶たなければならなくなったりするなど、多くの命を不幸にするからです。

不必要にふやさないという愛は、動物を幸せにするだけでなく、それを見て育つ子どもたちの心を育むことでもあるのです。飼われている動物の繁殖をコントロールし、動物たちの快適な生活環境を守るのは飼い主の義務であり、動物への愛なのです。

